

## 自然保護運動の裏方として

樋口 みな子（北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会事務局長）

### 1. 山との出会い

私が登山をするようになったのは、大雪と石狩の自然を守る会（旭川）との出会いからです。大雪山に縦貫道路を作るという計画があり、ひょんな縁で会に入会しました。仲間にはそうそうたる登山家もたくさんいました。高校時代に一度登ったきりの人間が、自然保護運動から山を知るようになったのです。

当時の事務局長は寺島一男さんで（現在は代表）、1979年12月29日から翌年1月17日までの厳冬期にメンバー4人のリーダーとして、石北峠から石狩岳、沼の原、トムラウシ山、オプタテシケ山を経て富良野岳まで130kmを20日間かけて全山縦走を仲間と共に成し遂げた人です。30年後も誰も真似した人はいないという壮大で輝かしい記録はいまも語りぐさになっています。その時のメンバーには、山のトイレ問題で地道な活動をしている小笠原実孝さん（現万計山荘友の会管理人）もいて、20年後に再会したときの驚きと感激は忘れられません。

30年前のトムラウシ山は奥深く遙かなる憧憬の山でした。当時は100名山ブームとは無縁で、仲間とテント泊装備で登ったトムラウシ山の南沼から見た満天の星に感激。まるで夢の世界にいるようでした。困難に直面した時に、心の引き出しからそっと開けては思い出す私のかけがえのない宝物になりました。この広い宇宙に、自分の抱えている悩みなどちっぽけなものだと思えたものです。すっかり山に魅せられ、大雪山系の山々には仲間にも誘われては登ってはいましたが、何故か山岳会に入ろうとまでは思わなかったのが不思議です。その会では10年近く機関誌の編集を担当しました。取材したり原稿をお願いしたりで、さまざまな自然保護運動をしている人たちと出会えたのが、いまでも私の財産です。

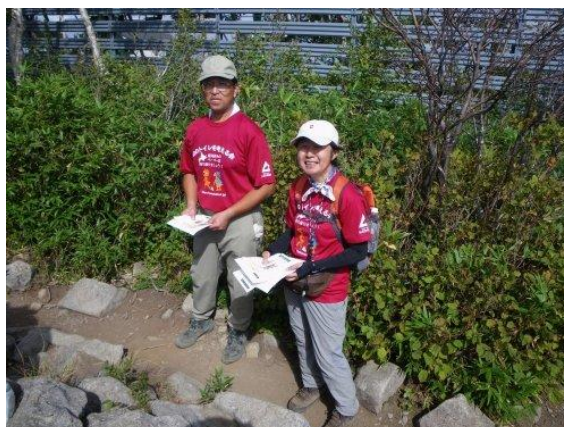
### 2. 自然保護運動の裏方として

また本格的に自然保護運動に関わるようになったのは1997年の夕張岳での高山植物の大量盗掘と、それに先だつてのアポイ岳でのヒダカソウの盗掘などがきっかけでした。

1998年3月、「高山植物保護と盗掘防止のための全道シンポジウム」が北大の学术交流会館で開催されました。私は当時、小野有五さんが代表の森と川を語る会で、事務局を手伝っていました。シンポジウムで全道的な組織が必要だという意見が多く出され、98年5月、北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会が結成されることになりました。各地の山岳会、市民運動団体、山野草会など50団体が加盟しています。委員長には、市民の立場に立って発言し、行動する、科学者小野有五さんに引き受けて頂き、私も裏方として11年間活動を支えてきました。

昨年11月には1年遅れですが10周年記念誌の発行と市民フォーラムを開催し、礼文、福島町、様似、夕張、雨竜など全道各地の加盟団体の会員と市民合わせて140人の参加で成功させることが出来ました。

高山植物の盗掘だけではなく、山のトイレ問題も深刻になっていました。2000年6月に山のトイレを考える会が立ち上がったのです。私は問題があれば、現場に行きどんな状況であるか知ることから始めたいと、清掃登山や、毎年山のトイレデーの啓発活動に加わり、日高山脈ファンクラブから、幌尻山荘のトイレが深刻だと知れば排泄物搬送事業にも参加してきました。



手稲山での山のトイレデー

どの問題も深く関われば関わるほど、市民運動だけではどうにもならない、行政も巻き込んでやらなくては進展しないと実感しました。

ネットワーク委員会では、盗掘への厳罰を求める請願署名を行い、法務大臣に請願書と共に提出。盗掘防止キャンペーン活動を各地で実施するなどしてきました。2001年3月、北海道は「北海道希少野生動植物保護条例」を制定しました。私たちが強く主張した、生息地そのものの保護という考え方は、十分には入れられませんでした。北海道で初めてこのような条例ができたことの意義は大きかったと思います。

現在、高山植物の盗掘は激減しましたが、エゾシカの増加で高山植物の食害が深刻になっていること、地球温暖化による積雪の減少などで開花時期の変化も起きています。

日本山岳会北海道支部は2003年から高山植物保護のパトロールの委託を道から委託を受けて会員の40人近くがパトロール員として登録して高山植物の保護活動に参加しています。道に毎年11月にパトロール実施結果を報告していますが、厳しい審査があります。09年度の全ての審査が通ったのは12月も暮れようとする時でした。実に10数回の書き直しでした。委託金をもらうことの大変さを身にしみて感じました。



礼文でのパトロールキャンペーン

### 3. 表舞台に

日本山岳会道支部は公益事業の一つとして09年11月から、道民カレッジに参画することになりました。自然保護委員長として「いままでやってきた活動を話せばいいから」

と役員会で決まり、トップバッターを引き受けました。

高山植物保護活動はなんとか話せても山のトイレ問題は、それぞれの山域によってどんな形式のトイレがいいのかも、いまだ決定打がない状況です。バイオトイレの仕組みから資料を調べて勉強しなければなりませんでした。何となくわかっているつもりだったが、もう一度資料を読んで理解出来る事ってありますね。

体系だってまとめたことがなかったので、私がやってきた自然保護運動がいかに情緒的な活動であったかと思ひ知らされました。資料を作りながら、北海道の自然保護の現状を自分なりにまとめてみて、今後の運動に生かせると思ひました。パワーポイントで説明するのにいままで撮ってきた写真（一部は山のトイレを考える会やネットワーク委員会のメンバーからの提供）をテーマにそって選ぶのも大変な労力でした。講師を経験しなければ、市民に向かっていかにわかりやすく講義することの難しさを理解できなかったと思ひます。

当日は日本山岳会の会員・会友、そして一般市民も含めて20数人の参加がありました。中身にまで触れる紙面はありませんが、小さな会場で座談会のような形で話す機会があったらもう少し肩の力を抜いて話せるのではと思ひます。資料に添って話すことばかりに気をとられて道民カレッジで話せなかったこともあります。

9月に白神山地を訪ねる機会がありましたが、その現状にも触れたかったです。現地を歩いて白神山地が世界遺産に指定されたことがいいことだったのかと考えさせられました。

規制による保護は長い目でみれば、森のためにはならない。入山規制によって、白神と人との関わりを断絶させ、またぎやキノコ採りなどの昔から伝えられてきた地域文化を崩壊させようとしていることを知りました。白神のブナの森の自然を次の世代に伝えようとするなら、森の恵みを知る人を育てなければならないと語る青森の村田孝嗣さんの言葉には、実践に裏打ちされた説得力がありました。

「自然保護を問いなおす」の著者、鬼頭秀一氏は『自然保護に関心を配るだけでなく、その運動が成功した後に、その地域の文化や暮らしというものが、経済的な観点も含めて「豊かな」生活を保障できるような、そのような連帯の運動に転換していく必要があるのではないだろうか』。と述べています。

2回目の講師、渡辺悌二先生が登山道の利用の時間的、空間的集中を分散させ、通年で山を楽しむようにすること、地元の人が食べていけて、その自然に誇りを持てるようなシステムにと話されました。

山をいつも身近に感じながら、次はこの山、あの山と思ひを馳せながら暮らしています。山をいつまでも美しいままで楽しむために、ささやかでも山の自然を守る活動を続けていきたいと思ひます。